

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-894-1781
090-9602-0700

諫早農地取水口 大量のアオコ

調整地一面のアオコ



諫早湾干拓農地で農業用水として使用されている調整地が一面アオコ一色に染まっている(写真は北部排水前がアオコで蛍光緑色に染まっている様子)。今夏のアオコの大発生は潮受堤防排水門付近だけでなく調整

地の奥部や本明川にまで広がっている。特に農業用水を取水する揚水機場周辺の水域にもアオコが大発生しており、アオコ入りの水で生産された農作物の危険性が問題になっている。

青酸カリの50倍

営農のためにも開門を

高橋徹教授(熊本保健科学大学)によると、調整地に発生しているアオコは青酸カリの50倍もの強い毒性を持つマイクロシスチンで慢性肝炎や肝ガンを引き起こす危険性があり、海外では多数の死亡例が報告されているという。高橋教授は、このままでは近い将来有明海沿岸において他の地域と比較して肝臓疾患が高い割合で発生すると警鐘を鳴らしている。

アオコは海水に触れると死滅するので、諫早を第2の水俣にしないためにも、一刻も早く水門を開放し調整地に海水を導入すべきであり、それこそが干拓地での農業を成功させる唯一の道である。

調査せずに【安全】

長崎県干拓室長

8月12日、長崎・佐賀両県の市民や漁業者らが長崎県庁を訪れ、同県干拓室に対し、調整地で大発生しているアオコの調査等を求める要請書を提出した。

市民らは、強い毒性が指摘されているアオコが発生している水を農業用水として利用することに問題はないのかと質問した。これに対し、対応した橋本祥仁諫早湾干拓室長は「安全である」と断言した。

市民らが橋本室長に対して、どのような根拠に基づいて安全と断言するのか、調査は行っているのかと質問したところ、橋本室長は、調査はしていない、被害が出ていないから安全だと答えた。

海外では多数の死亡例が報告され、研究者からも危険性を指摘されているにもかかわらず、調査もせずに安全と言い切る長崎県の姿勢に対して市民らからは人体実験をしようとしていると怒りの声が沸き起こった。

馬奈木昭雄弁護士は、疫学調査もせずに安全と言い切るのは県民を騙すものであり、かつて水俣病の被害を拡大させた行政の過ち

を繰り返すものであると厳しく指摘した。

ユスリカ大発生



現在、諫早干拓調整池ではユスリカが大発生し、堤防道路の交通や周辺住民に影響を及ぼしている(写真は堤防道路中央部)。黒い点が全てユスリカ。ユスリカは環境悪化の指標とされており水質が悪化した水辺環境において大発生することでも知られている。この問題について、長崎県の橋本室長は、ユスリカは益虫であると答え開き直りとも取れる態度に終始した。